

能代市 令和4年度完了報告書

令和4年度「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方」に関する調査研究の完了報告書を次のとおり提出します。

1. 調査研究概要

(1) 調査研究の内容

能代市は、全国学力・学習状況調査及び県学習状況調査の教科の調査において、県平均を上回るなど良好な状況が続いている。質問紙調査においても、自尊意識や規範意識、地域との関わり、学習意欲等の項目で肯定的回答の割合が高く、特に、授業内での発表、話し合い、振り返りへの取組については、9割以上の児童生徒が肯定的回答をしている。このことより、各校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進んでいると捉えている。

市内各学校では、教科や学年の壁を超えた全校体制での授業改善が伝統的に行われており、教科横断的な教育課程編成等への基盤が整っていると認識している。

令和2年度からは中学校区を基本単位とした「コミュニティ・スクール」を導入し、これまで以上に地域の教育力を教育課程に活用しながら、地域ならではの創意や工夫を生かした特色ある学校づくりを進めている。「コミュニティ・スクール」の仕組みを活用し、「社会に開かれた教育課程」の視点を基に、学校と地域が連携したカリキュラムを強化するなどカリキュラム・マネジメントを推進していこうとしているところである。

このような本市において、カリキュラム・マネジメントに関して特色ある取組をしている次の3校を、調査研究のための実践校として選定し調査研究を行ってきた。

◆能代市立第四小学校◆

目指す子ども像「あかしやの子」を設定し、その実現に向けて「見通す・学び合う・振り返る」の過程を意識した共通実践への取組や、授業研究会を核とした教師の学び合いによる授業改善に取り組む。

◆能代市立能代第二中学校◆

教科の枠を超えた協働研究に取り組み、P D C Aサイクルをもとに教科横断的な視点から授業改善するとともに、新学習指導要領の趣旨を生かし、「見方・考え方」を働かせた「学び」と「振り返り」の共通実践に取り組む。

◆能代市立ニツ井中学校◆

地域学校協働活動推進員を活用しながら「地域に開かれた特色ある学校づくり」を推進しており、令和元年度文部科学省「小・中学校等における起業体験推進事業」を継承し、コミュニティ・スクールの機能を生かしながら地域創生等を基軸とした特色ある教育活動に取り組む。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取 組 内 容	
	実 践 校	事 務 局
4月	・令和4年度研究計画立案 ・実践校におけるカリキュラム・マネジメント研究・実践（～3月）	・調査研究計画書作成・提出
5月		・カリキュラム・マネジメント連絡協議会（5/30：文部科学省主催）
6月		
7月	・第1回カリキュラム・マネジメント検討会議（7/11）	
8月	・カリキュラム・マネジメント検討用シートによる自己評価の実施①	*教育情報誌「ふいご」による情報提供（通年）
9月	・カリキュラム・マネジメント事業に係る実地調査（9/2 第四小学校）	
10月	・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議（10/7）	
11月	・手引き（実践校）の作成	・手引き（事務局）の作成
12月	・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議（12/17）	
		・各校にポンチ絵「カリキュラム・マネジメントとは？」配布 ・各校に「カリキュラム・マネジメント3か年計画」周知
1月	・カリキュラム・マネジメント検討用シートによる自己評価の実施② ・完了報告書（実践校）の作成	・完了報告書（事務局）の作成 ・カリキュラム・マネジメントQ&Aまとめ
2月	・秋田県教育研究発表会で発表（2/2） ・カリキュラム・マネジメント事業成果報告会（2/16） ・第3回カリキュラム・マネジメント検討会議（2/20）	
	・完了報告書（実践校）を市教委に提出	・調査研究完了決算書・調査研究完了報告書のまとめ

3月	<ul style="list-style-type: none"> ・調査研究完了決算書・調査研究完了報告書の提出 ・県内市町村教委等に手引き送付
----	--

2-1. 調査研究の内容

<p>学校名 能代市立第四小学校</p> <p>(1) 研究テーマ</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究</p> <p><input type="checkbox"/> b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究</p> <p><input type="checkbox"/> c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究</p> <p>(2) 調査研究の内容</p> <p>本校の学校教育目標は「夢を育み、生き生き学ぶ『あかしやの子』の育成」である。目指す児童像を次のように設定し、それぞれに年度ごとの重点項目を設けて、具体を進めてきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつがよく、礼儀正しい子 →（重点項目）相手の目を見てあいさつする。 ・体を鍛え、命を大切にする子 →（重点項目）けがや病気、事故や災害から身を守る。 ・しんぼう強く学び励む子 →（重点項目）学び合い、高め合う。 ・やさしさを行いで表す子 →（重点項目）誰かのために役立つ行いをする。 <p>本研究では、本校の伝統的な取組である「あかしや運動（目指す児童像に沿って諸計画を編成し、意識化・具現化を推進する取組）」をカリキュラム・マネジメントの視点で捉え直し、カリキュラム・マネジメントの側面 i～iii に留意しつつ、次の内容についてより望ましい在り方を探究し、学校経営の充実に役立てていきたいと考える。</p> <p>このことを踏まえ、令和4年度は次のように取り組んだ。</p> <p>①学校教育目標等の設定とビジョンの共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価（全職員による協議）を踏まえ、年度終盤と年度当初の職員会議等で「学校経営目標」とその具現化に向けた「経営の重点」を整理し、各指導部や各学年部の経営に繋げる。 ・保護者に対しPTA総会で経営ビジョンを示し、学校報等で繰り返し周知を図る。 ・学校運営協議会において経営ビジョンを提案し、承認と助言を得る。 <p>②学校教育目標等の具現化に向けた取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目指す児童像と重点的な取組の具体を整理し、各主任が前年度の反省に基づいてリーダーシップを発揮できるように校内体制を整える。 ・学校教育目標等の実現に向け、重要となる各教科等の内容を選択し、教育内容を教科等横断的な視点で組織する。 ・目指す児童像と関連付け「本校で育てたい資質・能力」を次のように設定する。また、それぞれに「要となる教科等」を位置付けて、指導と評価の場を明確にするとともに、教科等横断的に取り組むことと重点的に取り組むことを整理し具現化を図る。

- ◇あいさつがよく、礼儀正しい子 →よりよい生き方を考え、実行する力
 <要となる教科等> 道徳
 <児童・保護者等に示すキーワード(手立て)> 心をつなぐ「あいさつ」
- ◇体を鍛え、命を大切に子ども →安全と健康を意識し、行動する力
 <要となる教科等> 体育(保健)
 <児童・保護者等に示すキーワード(手立て)> みんな一緒に「ヘルスアップ」
- ◇しんぼう強く学び励む子 →他者との協働により学びを深化する力
 <要となる教科等> 算数、総合的な学習の時間
 <児童・保護者等に示すキーワード(手立て)> 「学び合い・高め合い」
- ◇やさしさを行いで表す子 →自他のよさを見付け、自主的に活動する力
 <要となる教科等> 特別活動(学級活動、児童会活動)
 <児童・保護者等に示すキーワード(手立て)> 「勇気付け」

- ・「他者との関わりで学びを深化する力」の具現化については、算数科の「比較・検討」に係る指導を軸とし、他の教科等においても重点的に取り上げ、横断的な取組とする。

- ・「学び合い高め合う算数授業スタンダード」の共通理解を図る。
- ・市教育委員会指導主事要請による算数授業研究会及び授業を見合う会を実施する。
- ・一覧表を作成し、「比較・検討」に重点的に取り組む教科・単元を整理する。

- ・「総合的な学習の時間」の実践においては、本校の課題である「学びの場での地域連携」に留意しつつ、3年生以上の各学年において特徴的な一単元の開発・整理を行い、協働的な学びの充実を目指す。

③あきた型学校評価を基盤としたPDCAサイクルの確立

- ・諸調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図る。
- ・諸調査やアンケート等の調査項目から、評価指標を適切に設定する。
- ・あきた型学校評価を基盤として、職員による自己評価・保護者アンケートの結果を踏まえた改善等を行いながら、PDCAサイクルを確立する。

④学校運営協議会等と連携した人的・物的資源の活用

- ・教育活動の実施に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用する。
- ・学校運営協議会制度の機能を生かし、連携が必要な活動については地域学校協働活動として行う。
- ・学校教育目標等の「設定」「具現化」「評価」の各段階において、保護者及び学校運営協議会委員等と適切に連携する。
- ・生活科・総合的な学習の時間や他教科等の学習において、地域学校協働活動を軸にしながら、地域人材を効果的に活用する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策 (○：成果, ●課題)

①成果・課題

○学校教育目標の具現化を目指し、目指す児童像から「育てたい資質・能力」を設定し、前年度の反省を踏まえて重点項目を示した。各主任が、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させ、具体を進めることができた。 【校内体制の整備】

○次年度の構想に当たり、目指す児童像につながる「育てたい資質・能力」の内容・文言の見直しと児童等に示すキーワード(手立て)の設定を、学校評価に合わせ全職員で行ったことで職員の参画意識が一層高まった。

【キーワードの設定とビジョンの共有】

○「他者との協働により学びを深化する力(キーワード：学び合い)」の具現化については、重点教科である算数科の「比較・検討」に係る指導を要とし、他の教科等においても重点的に取り上げ、横断的な取組とすることができた。

【一覧表の作成・整理】

○「くらべる」という言葉が、その手法とともに児童に定着した。算数科の同じ単元の中でも、「くらべる」のに取り組みやすい時間とそうでない時間があることが見えてきた。徐々に、より効果的に「くらべるタイム」をもてるようになってきた。

【くらべるタイムの充実】

○算数以外の教科においても、「くらべる」視点を焦点化することによって、話し合い、学び合い、課題解決に向かえる手応えがあった。 【他教科への広がり】

○あきた型学校評価を基盤として、職員による自己評価や保護者アンケート、児童による四小学びのアンケートなどを実施し、その結果を踏まえた年度中の成果や課題を共有し、改善等を行うなどして、一連のPDCAサイクルを構築することができた。

【評価の構築】

●「くらべるタイム」では、できるだけ児童の発言をつないで児童の言葉でまとめに迫りたい。どんな視点を与えるか、児童の発言をじっと待てるかなどが、クリアすべき課題として見えてきた。

②改善方策

・総合的な学習の時間での「特徴的な一単元」を整理・開発することを目指し、3年生以上でプランニングシートを作成した。教科等とのつながりも明らかにして、教科等横断的な視点で特徴的な単元内容を捉え直し、令和5年度以降のマネジメントに生かしたい。

・生活科・総合的な学習の時間や他教科等の学習における地域人材の活用等については、更なる児童の学びの充実につながるよう、地域の協力のもと、一層の連携をしながら取り組んでいく。

・引き続き細かなPDCAサイクルにし、短期間での改善、機を逃さず教職員で協議しながら、教職員や児童を巻き込んだカリキュラム・マネジメントの更なる推進を目指す。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
4月	令和4年度研究計画立案・共通理解 カリキュラム・マネジメント調査研究に係る実践
5月	
6月	
7月	第1回カリキュラム・マネジメント検討会議（方向性の確認）
8月	自己評価の実施①
9月	実地調査（授業参観、調査研究経過説明）
10月	第2回カリキュラム・マネジメント検討会議（実践の確認）
11月	「手引き」作成開始
12月	自己評価の実施②
1月	令和4年度の研究のまとめ
2月	秋田県総合教育センター研究発表会での発表 完了報告書・「手引き」作成完了 第3回カリキュラム・マネジメント検討会議（成果の検証）
3月	2年間の研究の総括

2-2. 調査研究の内容

学校名 能代市立第二中学校

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

秋田県教育委員会が学校教育共通実践課題として推進している「ふるさと教育」は、全教育活動を通して「地域に根ざしたキャリア教育の充実」及び「“問いを発する子ども”の育成」に取り組むことを核に、生きる力の育成を目指している。能代市の学校教育、本校の学校経営も「ふるさと教育」を基盤としており、ふるさと教育の充実を図ることが本校におけるカリキュラム・マネジメントと捉えている。カリキュラム・マネジメントを機能させるためには、「ふるさと教育の充実のために、全教職員が自分の立場から学校経営に参画する手立てを共通の言語で伝え合い、実践すること」が重要であると考えます。

「“問いを発する子ども”の育成」の基盤となる「秋田の探究型授業」における授業改善の視点は、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組及び方向性と軌を一にしていると言われており、全県的に浸透している。本研究の「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」を推進していく上で、全教員がイメージを共有し、共通の言語で伝え合い、共通実践していくための基盤である。したがって、今年度の本校の研究主題を「“問いを発する子ども”の育成」の副題を引用し、「問題を発見し、他者との関わり

りを通して主体的に問題を解決していく生徒の育成」とした。秋田の探究型授業における授業改善を中核に据えることで、「教科の壁を超えた協働研究《サブジェクトフリー》」は一層機能する。全校体制で基盤を一層固めていながら、各教科等の特質に応じて見方・考え方を働かせた授業づくりを教科部ごとに推進する。

全ての教科等において探究のプロセスを機能させた授業を推進していくことで、生徒が学び方を身に付け、授業の中でも主体的に学びを構築できる「学びのセルフマネジメント」の部分が増えていく。本研究においては、「学びのセルフマネジメント」が生徒にとって目指すカリキュラム・マネジメントであり、生徒とイメージを共有しながら、授業改善を進めていく。

このことを踏まえ、令和4年度は次のように取り組んだ。

【カリキュラム・マネジメントの側面 i について】

- ・秋田県はベテラン教員が多く、大量退職が続いているため、ベテランの優れた指導スキルを継承する取組を推進してきている。若手教員が増えてきている現在、ベテランから若手教員への一方向の継承から、ベテランも若手も一緒にスキルアップを図る協働的な取組へのシフトが求められていく。サブジェクトフリーは学校全体でスキルアップが図られるシステムであり、この課題に対応するためにも有効と考える。
- ・「主体的な学び」及び「対話的な学び」は秋田の探究型授業を通して全校体制で取り組み、教科等の特質によって「見方・考え方」を働かせながら実現を図る「深い学び」は各教科部を機能させて取り組む。「学校全体・教科部等の小集団・個々の教員」が担う部分を明確にし、それぞれが果たす役割を共通理解しながら主体的な研究体制を構築していくことも本研究のねらいのひとつである。

【カリキュラム・マネジメントの側面 ii について】

- ・あきた型学校評価を基盤として、全校でサブジェクトフリーの実践を共有し、全国・県学力調査等の結果、職員による自己評価、生徒・保護者アンケートの結果を踏まえた改善・マイナーチェンジを行いながら、PDCAサイクルを確立する。
- ・サブジェクトフリーを通して、生徒は「学びのセルフマネジメント」を身に付けていく。本県独自の家庭学習文化である「家庭学習ノート」は、本校でも既に習慣化されており、「学びのセルフマネジメント」の象徴とも言える。生徒会（学芸専門部）による集会を実施して、家庭学習を中心に一層の意識化を図っていく。
- ・年5回程度の授業研究会における成果と課題を生徒の具体的な姿を基に積み重ねていく。

【カリキュラム・マネジメントの側面 iii について】

- ・人的・物的資源の活用については、地域学校協働活動推進員、学校運営協議会、行政等の協力を得ながら、実践・評価・改善につなげていく。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策（○：成果，●課題）

○当たり前のこととして多くの学校で実践してきたことを整理して価値付けたり、他校の好事例を取り入れたりするなど、本県、本市で行っていることの精度をより一層高めることができた。

○教科主任や生徒指導主事等、各部会の主担当を核としたチームとしての取組を重視したこ

とによって、リーダーシップの醸成、スキルの波及、同僚性の更なる向上につながった。教科主任が若手であっても先輩の教科部員と授業づくりについて日常的に意見を出し合える雰囲気生まれた。

- 秋田県の「ふるさと教育」や「秋田の探究型授業」「能代の教育」は、学習指導要領の改訂や「令和の日本型教育」等によって示された新たな方向性に沿って先進性を保ちつつ進化してきている。新たな教育活動を生み出すことや、客観性の高い取組を持続可能にしていくことについて、今後も取組を進めていきたい。
- A I型ドリル（導入予定のドリルには記述問題の採点機能はない）を導入し、タブレット端末持ち帰りも含め新たな活用の方向性を探る予定である。これまで以上に「考えたことを言葉や図・表などを使って表現し、伝え合いながら協働的に学ぶ」場面を意図的に設定していきたい。家庭学習においては、A I型ドリル完結ではなく、探究のプロセスを意識して構成する家庭学習ノート（タブレット端末におけるノート、レポート的活用も含む）の役割も重要になってくるので、学び方の構築の新たな方法について、研究を進めていきたい。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
4月	・カリキュラム・マネジメント研究・実践（～12月）
5月	
6月	
7月	・第1回カリキュラム・マネジメント検討会議
8月	
9月	・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議
10月	
11月	・中 旬：手引き（実践校）を作成開始
12月	・カリキュラム・マネジメント検討用シートによる自己評価の実施②
1月	・中 旬：完了報告書（実践校）を作成開始 ・13日（金）：Q&A回答完成 ・19日（木）：センター発表スライド及び配付資料完成 ・27日（金）：手引き（実践校）完成
2月	・2日（木）：総合教育センター発表（各校1名） ・10日（金）：完了報告書（実践校）を市教委に提出
3月	

2-3. 調査研究の内容

学校名 能代市立二ツ井中学校

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

本校は、教育目標「ふるさとを愛し、心豊かでたくましく生きる生徒」の具現に向け、「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成」を研究テーマとし、地域や社会における産業の役割を理解し、地域創生等に生かす資質・能力の育成に向けた研究に取り組んできた。

総合的な学習の時間「きみまちカンパニー」活動を軸として、生徒と地域の協働による活動展開、協力校（小学校）と連携した9年間の系統的な活動になることを目指した初年度の調査研究を終え、以下の課題が出されている。

- 1 各学年が目指す「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」が不明確である。
- 2 全職員でカリキュラム・マネジメントに取り組む意識が希薄である。
- 3 活動のねらい（ゴール）が曖昧で、全ての児童生徒の達成感や満足感につながっていない。

このことを踏まえ、令和4年度は次のように取り組んだ。

①資質・能力系統表を生かした「二ツ井小・中学校きみまちカンパニー」の継続

- ・「二ツ井小・中学校きみまちカンパニー活動 資質・能力系統表」より、各学年の児童生徒が身に付けるべき資質・能力を明確にする。その育成に向けては、全職員・全教科で、教科等横断的な視点に立って取り組む。資質・能力の育成に向けての取組が明確になることで、教職員の進む方向性が定まり、一体感のある活動につなげていく。
- ・小・中学校ともに、活動時間を確保し効率よく実践できるように、教育課程の連携を図る。

②生徒の実態や考えを生かしたPDCAサイクルの確立

- ・生徒の考えを生かしながら、活動のねらい（ゴール）を設定する。これにより、生徒の活動に対する意欲を高め、達成感や満足感につなげていく。
- ・事前・事後アンケートや活動の見通しや振り返りを記録する自己評価カードを工夫するなどし、生徒によるPDCAサイクルを確立する。
- ・学校運営協議会の意見をいただきながら、検証改善サイクルを確立する。
- ・全国学力・学習状況調査や県学習状況調査の質問紙等を基に、地域創生事業と生徒の意識の関連性について分析する。

③学校運営協議会等と連携した人的・物的資源の活用

- ・学校運営協議会委員等からは、「きみまちカンパニー」活動に対して称賛の声が多く、二ツ井小・中学校の特色ある事業が、地域とともに大々的に展開されたと考えている。1年目の経験を生かして、更なる人的・物的資源の活用を積極的に進め、教育効果を高める。
- ・地域学校協働活動推進員、学校運営協議会、行政等の協力を得ながら、実践・評価・改善につなげていく。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策 (○：成果, ●課題)

- 年間指導計画を作成・活用することで、教科横断的な視点で授業をつくらうとする意識が高まり、授業改善につながった。
- 教員だけでなく生徒とともに PDCA サイクルを確立し、活動ごとの小さい PDCA サイクルと探究の過程やきみまちカンパニー全体の大きな PDCA サイクルを絶え間なく回したことで、「きみまちカンパニー」を学校全体として計画的・組織的に実現することができた。
- 学校教育目標を実現するためには、地域との連携・協働が大変重要であり、地域と連携・協働することが、地域に対する生徒の熱い思いや高い志の育成につながっていくということを実感できた。
- 今年度の実践を踏まえ修正した年間指導計画を次年度活用することで、教科横断的な視点での授業や様々な活動を計画的に実施し、地域創生事業「きみまちカンパニー」の深化や授業改善に努めたい。
- 今年度確立した PDCA サイクルを機能させながら、持続可能な活動を目指して、さらに検証・改善を図る必要がある。地域との連携を大事にして、協働して地域創生に貢献できる活動としたい。
- これからも、全職員がそれぞれの持ち味を活かしながら力を合わせ、本校の教育課程を全職員が語る学校づくりを通して、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していききたい。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
4月	・研究方針の確認と教員への情報共有 ・小中職員打合せ
5月	・「年間指導計画」、「資質・能力系統表」の配付 ・地域創生事業「きみまちカンパニー」活動開始
6月	・小中職員合同会議 ・協力企業との打合せ
7月	・「きみまちカンパニー」探究の過程Ⅰ（1学期）の振り返り
8月	・小中職員合同会議[2学期の活動について]
9月	・「きみ・パ・フェス」に向けての準備
10月	・小中職員合同会議[きみ・パ・フェスに向けて] ・小中PTA役員会 ・地域の協力企業との打合せ
11月	・「きみ・パ・フェス」実施 ・「きみまちカンパニー」探究の過程Ⅱ（2学期）の振り返り
12月	・「二ツ井について考える集会」の実施と地域創生事業「きみまちカンパニー」の振り返り

	・「きみまちカンパニー」地域（来場者・協力企業）や保護者アンケートの実施
1月	・学校評価（教員・生徒）実施
2月	・小中職員合同会議[来年度に向けて]
3月	・次年度に向けた諸準備（改善や計画）

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（○：成果，●：課題）

- 学校教育目標の具現化を目指し、目指す児童生徒像から「育てたい資質・能力」を設定し、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させることで、学校経営における教職員の参画意識が一層高まった。
- 学校教育目標を実現するために、地域と連携・協働することで、地域に対する児童生徒の熱い思いや、高い志の育成につながっていくことを実感できた。
- 授業研究会が、「自分事研究会」へと大きく進化し「全員で授業づくり」に取り組むことができた。
- 今年度の実践を踏まえ修正した年間指導計画を次年度活用することで、更なる教科横断的な視点での授業や、様々な活動を計画的に実施していく必要がある。
- 今年度確立したPDCAサイクルを機能させながら、持続可能な活動を目指して、更に検証・改善を図る必要がある。
- 今後も、教職員一人一人が、自校の教育課程について語るができる学校づくりを通して「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していく必要がある。

4. 参考資料

- ・第1回カリキュラム・マネジメント検討会議資料
- ・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議資料
- ・第3回カリキュラム・マネジメント検討会議資料
- ・アンケート分析